

「生命都市」時代の環境と地域づくりを考える総合誌

1999/no.15

◆特集——地域のエコロジカル・プランニング

デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド

北欧諸国の「緑の開発」

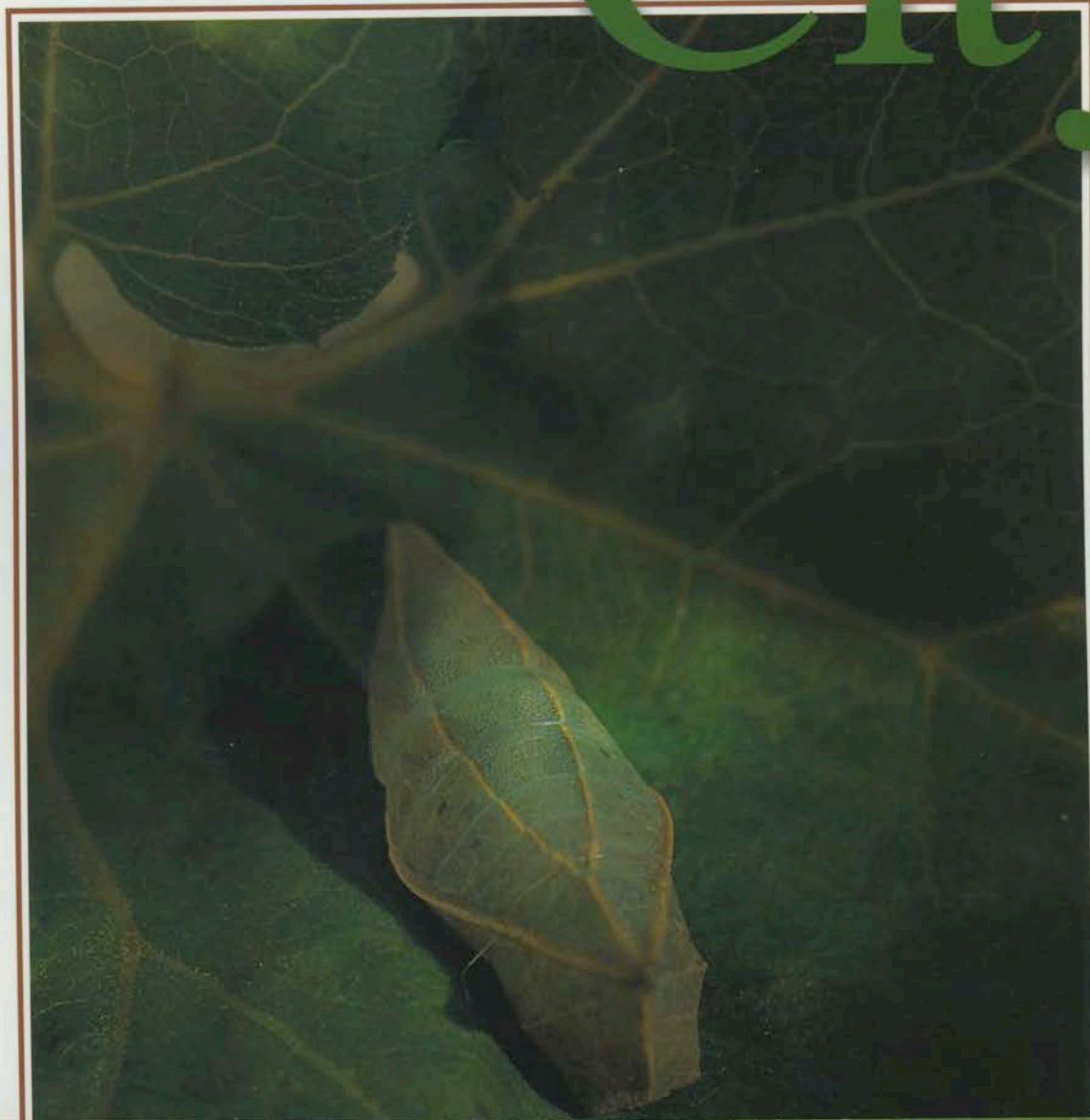
▶▶▶▶ 成功した都市計画 南米の環境都市「クリチバ」

◆緑の回廊とエコステーション——旧東ドイツ「ライプチヒ」

BIO City

A Magazine
for Sustainable Future.

ビオシティ



エコロジカルな「自然循環型社会」に向かって

21世紀の環境プラン

気候・風土、歴史・文化——地元を掘ることから始まる
エコロジカルな地域プランニング

緑の回廊と エコステーション

ローカル・アジェンダ21と
エコロジカルな都市再構築のモデルプロジェクト
——旧東ドイツ・ライプチヒ市——

ライプチヒ市では、東西ドイツ分裂時代の長い間、都市整備が行われてこなかった。そのため住宅も街並みもひどい状況にあった。90年のドイツ併合後、「アジェンダ21」の観点とエコロジカルな都市を基本とした再開発プロジェクトが始まった。それは未開発ゆえの利点を活かした都市の再構築、新しい田園都市の構想でもあった。しかし、その実現の前に立ちはだかったものがあった……。コミュニティを活かし、都市を再構築するには何が必要なのか。日本の地方都市のエコロジカルプランにも大きな示唆を与えてくれる。

エクハルト・ハーン 翻訳◎服部圭郎



ライプチヒ・プロジェクト地区の鳥瞰図



Dr. Ekhart Hahn (エクハルト・ハーン)
1942年7月ベルリン生まれ。62～69年、ベルリン工科大学で建築・都市計画を学んだ後、70年よりベルリン工科大学助教授となり、住居やコミュニティ計画の研究などを行う。75～76年にアメリカや中国に渡り、ここでの研究・経験を活かし、コンサルタントとして環境問題を視

野に入れたさまざまなアーバンデザインや居住計画に参加。その後はベルリン科学センターやエコロジカルな都市再生グループ、エコシティなどのディレクターとして活躍している。
1999年春、来日予定。

はじめに

1992年、リオデジャネイロで開催された国連環境会議の最終報告書の一つ「アジェンダ21(環境と開発についての21世紀に向けた行動計画)」第28章では、「持続可能な開発」を実現していくうえで、都市・町そしてコミュニティの役割の重要性を強調している。世界の自治体はこの観点から、自治体レベルでの環境問題への取り組みを「ローカル・アジェンダ21」としてまとめた。

ヨーロッパでこの「ローカル・アジェンダ21」に取り組んだもっとも重要なプロジェクトの一つは、93年から97年にかけてライプチヒ市で実施されたライプチヒ・オストラウム(東地区)・プロジェクト(Leipzig Ostraum Project)であろう。

このプロジェクトの目的は、現在のサステナブルな都市再生技術や経済・雇用政策に関する知識・知見を総動員し、活用・試行することにある。

ライプチヒ市は旧東ドイツに位置することもあり、90年の東西統合まではさまざまな意味において「開発されなかった町」である。

しかし、このことは、新たにエコロジカルなまちづくりを展開しようとするときには必ずしもマイナスではなかった。「未開発」ゆえのプラスのファクターを活かし、マイナスのファクターを克服していこうとするコンセプトとプラン、そしてそれを実行するうえでの現実の問題を報告する。

(これはライプチヒ・プロジェクトの97年報告書を抄記し、加筆・再構成したものである。)

1. プロジェクト以前 ——“未開発”ゆえの可能性

1990年におけるライプチヒ市では、約80%の建物が古く、60%の家屋が劣悪な状況にあった。屋根の雨漏り、壁のはがれたファサード、微臭い壁、朽ち果てたバルコニーなどは珍しくなかった。約60%のアパートの風呂が壊れ、上下水、電気や暖房システムも時代遅れで、ほとんどの場合劣悪な状況だった。

街路景観も惨憺たるもので、供給インフラ、静脈インフラ、道路と公共交通、公共の公園の再整備が求められていた。

さらに、東ドイツの都市の大気も工業活動による汚染(特にSO₂)によってひどい状況であった。多くの工場の閉鎖によって改善されたが、西ドイツの都市に比べると依然ひどかった。一方、西側の市場経済に対応できずに多くの企業が倒産したため、93年時点でも実質失業率は30%以上になっていた。

地方行政も疲弊しきっていた。包括的な都市計画や、建築許可の手続きなどの投資を適切な方向へと誘導できるような都市計画の手段は、ほとんど欠落していた。状況をさらに悪化させていたのは、多くの土地所有の問題が未解決だったことである。

しかし、このような難しい状況ではあったが、いくつかの肯定的な要素を発見することもできた。特に従来からの近隣住区のつくりや、適度に保存されていた歴史的な街路、周辺の田園地帯が西ドイツに比べるとあまり開発されていないことなどは、大きなポテンシャルであった。

都市の境界線と直接つながる河川敷や草地、広大な農場や伝統的で貴重な村落がこの地域独特のランドスケープ

を構成していた。土地利用が戦前とほとんど変わっていなかったのである。

また、政治的変革と東西ドイツ併合が市民団体と地方政府の間にきわめて建設的な関係を構築していた。90年代のはじめには、ほとんどの問題が協力関係においてのみ解決できると考えられ、人々は新たなパートナーシップを絶えず求めている。そこで、エコロジカルな都市開発を実践するために、コミュニティの外部からも専門家を招聘し、コンサルティングを依頼する態勢が組織された。

このような特殊な状況と、リオ会議などの追い風にもかかわらず、市の行政は環境共生的ではない西側の都市を参考にしたモデルをつくる作業に入り始めた。このため、すでに立ち上がっていたプロジェクトを遂行するには、新しい状況に対応できる新たなフレームワークを設定する必要性が生じていた。

2. プロジェクトの条件—— 人員不足と緊縮財政の中で

91～92年にかけて考えられたライプチヒ・プロジェクトの構想は、東西ドイツの統合によってつくられた多くの市民運動組織を連携させ、「環境優先の都市・田園を一体化させるような開発」のモデルにすることであった。しかし、このような市民運動組織は非常に脆く、その継続には外部からの支援が不可欠であった。

また、このプロジェクトでは、12の個別プロジェクト(下図、右ページ参照)がその地理的特性と解決すべき課題によって選定された。12のプロジェクトを連携させて、今後の地域計画のデモンストレーションになるようにプロジェクトの基礎がつくられるよう計

プロジェクト・エリア1 アーバン・エコロジー

1. 再開発地区 Neustadter Markt
2. ルードニッツ近隣地区開発
3. アイレンバーガー鉄道駅
4. エコ住宅モデル Obersdorfstraße
5. エコステーション/緑のワークショップ

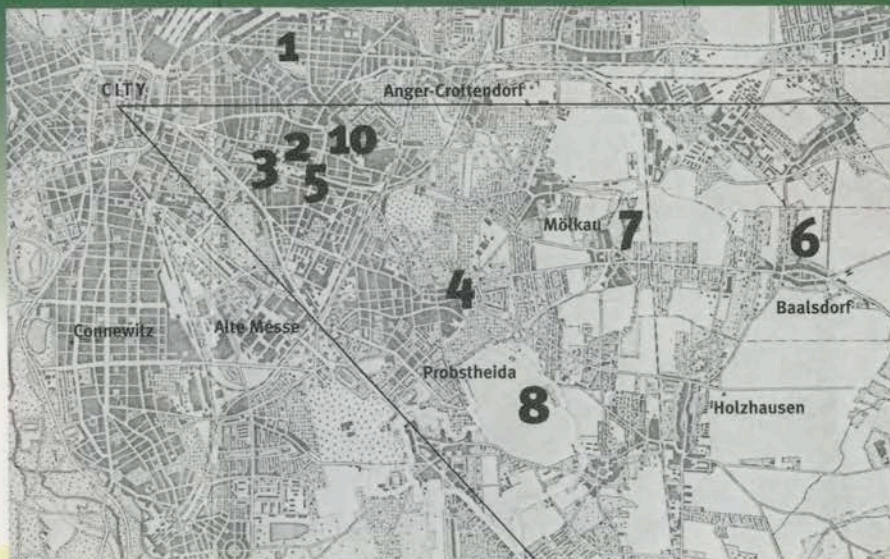
プロジェクト・エリア2 ルーラル・ディベロップメント

10. エコロジカルかつ社会性のある
ビジネス・サービス・センター
11. エコロジカルかつ社会性のある
建設業
12. 地域経済のサポートと従業者基金

プロジェクト・エリア3 経済と雇用プロジェクト

6. Linke-Hof Baalsdorf 農園
7. エコロジカルな市営農場 Molkau
8. Probstheida地区/リーチケ川
9. ピオトープと緑のネットワーク

3つのプロジェクト・エリアと
12の個別プロジェクトの概念図



3つのプロジェクト
エリアと12の個別
プロジェクトの主
な内容

■プロジェクト・エリア1

1. 再開発地区 Neustadter Markt

問題が特に多いインナー・シティ（83%の建物が劣悪な状況で、50%のアパートが空室、失業率は40%以上であった）。1991年から公式な都市再開発地区に指定されている。

〈目標〉

- a) 自立的な建物のリノベーションと住環境の改善
- b) 自動車交通の抑制と市民参加による街並みづくり
- c) 雇用の促進

2. ルードニッツ近隣地区開発

ここが繁栄していた時代（1880～1900）に形成された都心のコミュニティ。1995年以降、再開発エリアとして公式に指定を受けた。

〈目標〉

- a) 包括的でエコロジカルな近隣地区の開発（交通、エネルギー、上下水、建物の建て替え、環境の質などへの配慮）
- b) 新しいタイプの市民参加と市民コミュニケーション・システム
- c) 環境ビジネス関連のプロジェクトの優先利用地区（→10～12も参照）

3. アイレンバーガー鉄道駅

駅跡地と操車場跡地は、ライブチヒの東部においてもっとも重要な未開発地区である。土地利用計画では、ここに通道をつくる予定だった。

〈目標〉

- a) 土地利用計画を見直して、都心と周辺の田園とを結ぶ「緑の回廊」を整備（徒歩、自転車、自然のネットワークを統合する）
- b) 適度にエコロジカルな商業活動を含みつつ、市民利用を優先した開発

4. エコ住宅モデル Obersdorfstraße

昔からの Stotteritz という市のはずれの村に30戸の新しいエコ住宅を建設する。これは「環境建築協会」のプロジェクトである。

〈目標〉

- a) 都市の自然環境保全のモデル・プロジェクト
- b) 適切な手法に基づく自立的な参加型の建築
- c) 環境共生建築のコスト・ダウンの新しいモデル

5. エコステーション/緑のワークショップ

プロジェクト全体の中で中心に位置づけられるエコステーションは、アイレンバーガー鉄道駅の緑の回廊上にある機関車の車庫跡地（Lokschuppen）において整備される。

〈目標〉

- a) 必要な情報の提供、コミュニケーション活動の支援などをするインフラストラクチャーの整備
- b) 新しいタイプの自立的な、協調性のある計画および戦略決定を支援する組織

■プロジェクト・エリア2

6. Linke-Hof Baalsdorf 農園

1990年から事業を始めた有機農業の農園。栄養生態学と都心のエコロジカル農業のモデル・プロジェクトである。

〈目標〉

- a) 高品質な食料品の製造、加工、販売
- b) ランドスケープ・自然資源の保全
- c) 社会的セラピー・教育的機能
- d) 雇用の創出

7. エコロジカル市営農場 Molkau

荘園の跡地であり、都心から6kmという距離にありながら、150haに及ぶ農園と多くの離れ屋がある。市の管理下にある。

〈目標〉

- a) 地元のエコロジカルな農作物の生産、および販売の拡張
- b) 雇用と技術トレーニングの機会の創出
- c) 障害者と失業者の長期滞在用の家屋
- d) ランドスケープと農地の伝統的な自立的な管理手法の復活
- e) 自然および文化資源の保全

8. Probstheida 地区 / リーテ川

リーテ川は、都市部と田園部にまたがるプロジェクトの広域に流れるひどく汚染された小川である。

〈目標〉

- a) 小川の底や縁そして周辺地区の自然状態への回復
- b) 自然の状態に戻した地区への歩道や自転車道の整備
- c) レクリエーション用の自然・文化的風土を維持

した自然公園の整備

9. ピオトーフと緑のネットワーク

この数十年、移動手段は自動車が増え、歩道や自転車道の整備がおざなりにされてきた。

〈目標〉

- a) 都心のコミュニティのプロジェクトと田園地帯とを結ぶ緑の回廊、自転車道の魅力的なネットワークを整備
- b) 都市環境保全の行動を田園地区のエコ・システム計画と統合させる。
- c) 緑のネットワークの目的は、伝統的な農村とエコロジカル農業、多様なスポーツ・レクリエーション活動、園芸、新しい住宅との連携

■プロジェクト・エリア3

10. エコロジカルかつ社会性のある ビジネス・サービス・センター

ビジネスおよび雇用創出の戦略策定に関する実践的な支援を実施する。都市のエコロジカルな再生に貢献し、環境ビジネス（有機食品レストラン、自然食品の卸売業、環境に関心のある一般人にセミナーや会議を主催する教育・トレーニング機関）に従事しようとする企業はここに立地するべきである。

11. エコロジカルかつ社会性のある建設業

選定されたプロジェクトのエコロジカルな建築および再開発を実現させる組織。創造的かつ協調的な経済手法、雇用創出プログラム、手弁当の建設工事などによって、住宅および商業用の床面積を低価格に提供できるようにする。最初の利用者としては、社会的に不利な状況におかれている人々を考えている（ホームレス、失業中の若者、長期失業者など）。

また、建物の利用者は建築工事に携わる。

12. 地域経済のサポートと従業員基金

オストラム・プロジェクトの開発を通じて発生する環境ビジネスと、それに関連する雇用の創出を支援するプロジェクト。ジョブ・トレーニングのプログラムやエコロジカル製品の紹介プログラム、エコロジカルな企業、エコロジー指向の団体、上下水管理協会などがここに含まれる。



近隣公園の北面

都心と田園地区を結ぶ緑の回廊のコンセプト概念図

アイレンバーガー
鉄道駅
● エコステーション



都心●歴史的な市の中心部で市役所、博物館、劇場、大学などがある商業地であり交通の発達している地域。

近隣地区●都心と田園の間に位置し、都市性も自然も体験できる地域で、ハイクオリティで健康的な空間。

田園地帯●自然環境豊かなランドスケープを持つ地域であり、エコロジカルな経済のための基盤となる地域、そして、社会性のあるエコロジー指向の空間。レジャーなどのために公共交通などで容易にアクセスできる。

画されたのである。

しかし、デモンストレーション・プロジェクトに対する支援は、政治家や市の役人によって抑えられようとしていた。原因は予算不足、スタッフへの過剰な業務の集中、そして西ドイツの管理型モデルへの移行が挙げられる。

市議会から容認され、政治レベルでプロジェクトを実現するには、このプロジェクトによって役人の業務量を増加しないことと、市の財政に余計な負担をかけないことが求められた。言い換えれば、このプロジェクトの文脈に沿って既存の市の行政範囲を再解釈し、再構成することが求められたのである。

こうした中でプロジェクトを一体的かつ学際的な方法論で前進させていくには、既存の市の行政組織とかかわることを回避する必要があった。そこで、独立したプロジェクト協議会を設置し、舵取りグループによってこれを指導するという態勢を考えた。

これは、財政面と法律面からの要求を満たすため、そして都市計画というテーマが内包する困難さを克服するために必要であった。

さらに長期的な目標として、プロジェクト初期の補助金による投資は、将来の資源を保全・確保するために戦略的に活用する必要があった。

3.プロジェクトの目標とエリア ——12のモデル・プロジェクトを 3つのエリアに

(1) ライプチヒ・オストラウム・プロジェクトは大きく4つの目標を持つ。

①12のモデル・プロジェクトの実践を優先した開発

「エコロジカルな都市・田園開発」をめざしたさまざまな組織をネットワーク化することによって、相乗的な効果が発揮できることに重点を置く。

②「パブリック・インボルブメント・アプローチ」という新しい取り組みの試み
多様な利益団体の協調、建設的な関係をつくる新しい試みを取り入れ、積極的に市民参加のレベルを高め、従来参加しなかった階層にも自発的に参加することを促す。こうした仕組みを実現する新しいタイプのインフラストラクチャーとして、後で述べる「エコステーション」を設ける。

③地元の企業やドイツ環境企業連盟 (the Association of Ecological Enterprises in Germany) などとの協力

さまざまな協力態勢をしき、環境産業における新たな雇用を創出する。

④国際的なワークショップの組織化

サステナブルな都市計画や都市開発の研究や発表を通して、他のコミュ

ニティと経験や知見の情報交換を積極的に行うよう努める。また国内外での最も先進的な取り組みを紹介し、セミナーやワークショップを通じて問題を解決できるように図る。

(2) 12のプロジェクトは、それぞれの課題と組織関係によって3つのプロジェクト・エリアに分類される (p75参照)。

■エリア1/アーバン・エコロジー (個別プロジェクト1～5)：システム・アプローチにより、都市のエコロジカルな再生の手法と実践のさらなる開発を優先する。

■エリア2/ルーラル・ディベロップメント (個別プロジェクト6～9)：「エコロジカルな都市・田園開発」を具体化するうえでのデザインと実行方法に焦点を置く。

■エリア3/経済と雇用プロジェクト (個別プロジェクト10～12)：エコロジカルで社会性のあるビジネスのサービス・センターや、建設業者を含む地域経済のサポートや雇用計画を取り扱う。特に創造的な経済手法のシステムティックな開発とその支援を行う。

4.具体的な計画—— プロジェクトの核となる アーバン・エコロジー地区

(1) エリア1のアーバン・エコロジー地

アイレンバーガー鉄道駅の緑の回廊の4つの実験エリア

アンガー・クロッテンドルフアー線路
地区温熱パイプの芸術品化、工房や手工芸用用地等の整備

田園へのゲート

レクリエーション、ビジネス、住宅用などに利用。公共交通センター（パークアンドライドのための列車、バス、自転車など）、田園に向かう自転車用小路の整備

アーバンポール
街へのゲートであり、緑の回廊との接点とする

近隣公園とエコステーション
多様な緑の空間、近隣地域とのネットワークづくり等

Öko-Stadt, 1996

H. Baller, 1995

区（個別プロジェクト1～5）は、本プロジェクトの核として位置づけられた。この地区がプロジェクト全体の目的に対応しているとともに、ライフ基金をもつヨーロッパ・コミッションが設立以来の最高額の補助金（430万ドイツマルク）を支給してくれた、その理念にも対応しているからである。

アーバン・エコロジー地区は、以下のように3つに分かれている。A=アイレンバーガー鉄道駅の緑の回廊、B=ルードニッツ、アンガーにおけるエコロジカル近隣地区開発、C=エコステーション/緑の緑のワークショップ、である。そして、他の個別のプロジェクトに関しても、このエリアと密接な関係を持つように開発されることが求められた。

以下は、アーバン・エコロジー地区のコンセプトと初期段階の進捗状況に関する概要報告である。

A. アイレンバーガー鉄道駅の緑の回廊

アーバン・エコロジー地区の鍵は、アイレンバーガー鉄道駅を多機能的で行動重視の都心と、田園とを結ぶ緑の回廊にデザインし直すことにあった。都市と田園との関係を再活性化する過程を示し、それ自体が強烈なアイデンティティを有する新しいアーバン・デザインを創造するのである。

こうしたアプローチは、生産と再生産のサイクルを組織的・技術的からのみ取り組んでいても不十分であるという確信にもとづいている。エコロジカルかつ社会的・文化的な文脈をもって都市と田園との関係を考える必要があ

るのである。

また、人々に将来には可能性があるという希望を抱いてもらい、参加を促し、この実験への関心を高めてもらうためにも、新しい変化のビジョンを提示する必要があるという考えもあった。

アイレンバーガー鉄道駅はかつて、ライプチヒ市の中央駅であったが、20世紀初頭に他の駅ができてからは利用は減る一方であった。第二次世界大戦でほとんどが破壊され50年に閉鎖。以来土地はほとんど使われていなかった。

東西ドイツ併合以後は、この価値の高い土地をどのように利用するかで議論が交わされてきた。市の都市計画局と経済局は新たな開発を、交通局は都市と田園とを結ぶ自動車道路（アウトバーン）としての整備を望み、市民グループと公園課は高密度な住宅街における公共緑地として整備されることを望んだ。

市議会は新しい開発と公園整備とに使うことに決めたが、この妥協案には誰もが不満であったため対立は続いた。

その後、行政担当者、市民団体、地主、都市計画家などが参加する学際的なワーキング・グループが会合を重ね、将来的な活用方法に関する包括的な調整作業を行った。

そして打ち出された駅周辺を都市と田園地帯とを結ぶ緑の回廊として整備するというコンセプト（p76図参照）は、市議会も認めることとなった。

しかし、緑の回廊のコンセプトが実施されるには、予算の問題があった。

そこで、さまざまなアイデアが取り入れられた。たとえば、エリア内を走る

地区温熱パイプを地下に埋設するにはコストがかかりすぎるので、パイプを緑と公共空間の計画と一体化し、「芸術品」として位置づけ、共産主義時代から存在する機能的・構造的要素として展示するようにしたのである。

この地区の設計は社会性をも有するエコロジカルなものとし、プロの都市計画家と芸術家の指導のもと、学生、若者、市民、さらに失業中の人など、すべてが参加できるようにした。緑の回廊は、契約された建設会社のみがつくるのではなく、多くの人々の長期にわたる協同作業の結果として整備されるべきだからである。

こうして決められた最終的な計画は、市の中心部から東端までの2km、およそ16haの敷地を、以下の4つの連続した利用と体験ゾーンとに再構成させようとするものであった。（上図参照）

1. アーバン・ポール [Urban Pole]

アーバン・ポールは街へのゲートにあたる。4.2haほどの跡地が、歴史的建造物の残るシティ・センターからわずか数百mの距離にある。緑の回廊はこの地域を80～100mの幅で通過し、オールド・ダウンタウンとつながる。

都市デザインと事業化計画では、ここで50,000m²の床面積を想定した。これは、全体の計画を考えたときに新しい建物が供給する適度な床面積であり、住居、ビジネス、文化的活動などに利用される。

デザインは、社会かつエコロジカルな問題に意識のあるビジネス組織、そしてインタラクティブな住民コミュニ



アーバン・ボール。アイレンバーガー鉄道駅のマインビル



アイレンバーガー鉄道駅のマインビル



アンガー・クロッテンドルファー線路跡



田園へのゲート

ティ(たとえば、片親の家族や高齢者など)などが利用することを想定して実施される。

2. 近隣公園とエコステーション

アーバン・ボールとリーベック橋の中間にある5.6haの第2ゾーンは、600m×85mの面積を有し、位置的にもサイズからも近隣公園となることが運命づけられている。

多様な緑とオープン・スペース、ピオトープ、人間と動植物のための空間、歩行者と自転車専用の小路、児童公園、青少年と子供のための半原生的な森林、エコステーションと連携しているエコロジカル・トレーニング・センター、モデル庭園などが計画された。

この公園に接する道路の幅を狭くしているのは、景観的な理由と周辺の地区とのつながりを強く持たせるためである。また、周辺の工業的活動は、新しいビジネス・エリアである「アーバン・ボール」か「田園へのゲート」の近くに移ってもらうことにした。

3. アンガー・クロッテンドルファー線路

周辺の田園と操車場とを結ぶかつての支線で、敷設面積は幅36～60m、長さが800mある。ほとんどが空き地で、ドイツ鉄道会社(Deutschen Bahn AG)

が所有している。この土地独特の魅力と価値は、田園風景とその近くにある馬車置き場、庭園、半分壊れかかっている工場などのコンビネーションである。

そこで、計画コンセプトでは既存する魅力を維持し、さらに高めることとした。空き地だけでなく、中庭や作業場もレクリエーションやビジネス、住民も利用できるなど、興味深い可能性を持っている。特に都市のエコロジカルな再生に関心のある新しいサービスや技術を有する企業に進出してもらいたいと考えている。

強調したいのは、ここの緑の回廊の一部をできるだけ公共利用を促す場所として位置づけ、必要最小限の資源で実現することである。

4. 田園へのゲート

この9haの土地はこれまでほとんど注目されてこなかった。しかし、都市のはずれの東の田園地帯へと広がる場所にあり、文化的活動・レクリエーションなどが行え、魅力あふれる環境を有している。この地域の風土の特徴を彩る草地、小川、湖、森、伝統的な村などの美しいランドスケープへは車を使わなくても簡単に行くことができる。

こうした環境優先の都市・田園開発も素晴らしいが、緑の回廊の一部を占め

るこの場所は特別な意味も持っている。

自転車道と緑の回廊のネットワークがこの場所を通り、都市と田園地帯のさまざまな地点を結んでいるため、これらは都市デザインをするうえで、特別な課題をデザイナーに課することになるのだ。ここの環境を再開発や再整備によって向上することにより、多様な投資や利用ができるだろう。たとえば、スポーツ、レクリエーション、健康関連、環境関連のサービスやビジネス、住宅などが考えられる。

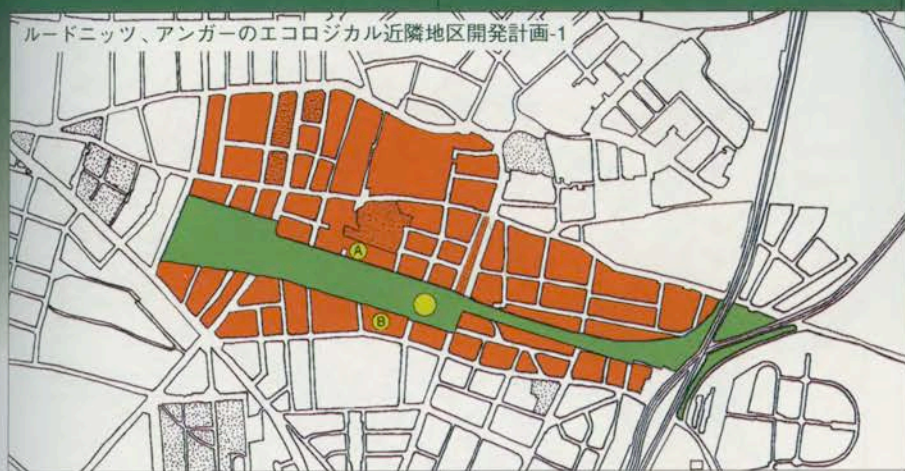
B. ルードニッツ、アンガーにおけるエコロジカル近隣地区開発

都市のエコロジカルな再生にとって、アイデンティティのあるまとまったアーバン近隣住区はもっとも重要な要素である。人々が目に見える形で、ますます悪化する環境問題を身をもって知るの、この近隣地区であるからだ。

「ローカル・アジェンダ21」の目標を達成するうえで、もっとも課題が大きいのも近隣地区である。ここでは、さまざまな細かい課題の解決が求められるのと同時に、文化やライフスタイルをも変化させていく必要がある。

こうした課題に取り組みやすい環境を創造していくのは、地方や中央政府、そして国際組織の責任であるが、何よ

ルードニッツ、アンガーのエコロジカル近隣地区開発計画-1



- エコロジカル近隣地区開発
ルードニッツ
- アイレンバーガー鉄道駅路線跡地
- エコステーション/グリーンワークショップ
- エネルギー効率に関する
モデルプロジェクトを行う建物

ルードニッツ、アンガーのエコロジカル近隣地区開発計画-2



- 歩行者用小路や自転車用小路が横切る
メインストリート
- 緑の回廊と
自転車のネットワーク
- エコステーション
- 歩行者用小路を組み合わせた閑静な通り
- 上下水道システム
- エネルギー効率に関するモデルプ
ロジェクトを行う建物

たくさんの人々が緑豊
かな公園にやってくる



りも重要なのは問題意識のあるグルー
プが集い、協同して問題の解決方法を
模索することである。

このような観点から、典型的なコミ
ュニティの取り組み例としては、ごみ
が考えられる。コミュニティがごみ問
題に積極的に取り組めば、ごみの削減
と分別回収システム、コンポスト・プ
ログラムなどさまざまな環境プログラ
ムを実践することが可能である。

もう一つの例は、住宅環境と微気候
についてである。具体的にはコミュニ

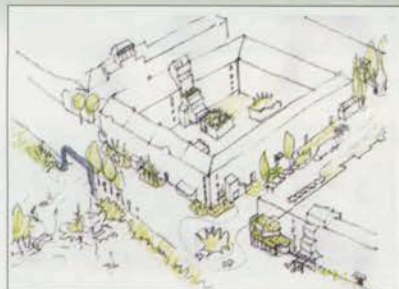
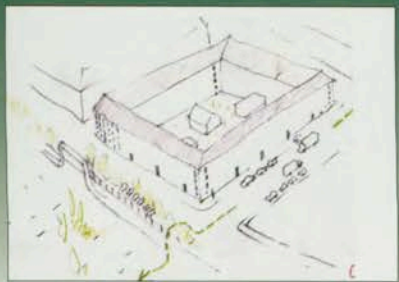
ティ・ガーデンや近隣公園、街路の緑道
化、建物の緑化、土の改良と排水状況の
改善などである。コミュニティ・レベル
での計画は、水、中水、地下水などが総
合して管理される分散的な上下水シス
テムをつくるうえでも適切である。

同様にコミュニティ・レベルでのエ
ネルギー・システムは、コ・ジェネレー
ション、地区暖房、熱交換技術、太陽エ
ネルギーに代表される再利用エネルギ
ー源の活用などの多くの試みを実践す
ることができる。さらに地区内の自動

車交通量の制限、減速、道路面積の減少、
歩行者・自転車専用道路の増加などの
施策も考えられる。

また、環境情報のコミュニケーション
に関する戦略も必要である。市民が
計画や施策決定に積極的に関与してい
なければ、十分な成果は得られないか
らだ。市民参加のコンセプト、環境情
報や環境教育が必要である。

その目標は、個人レベルでのコミュ
ニティの環境に対する責任感の醸成と、
さまざまな環境再生という試みのなか



で、新たに雇用を創出し、また創出された雇用機会を確保するためのジョブ・トレーニングを行うことである。

根本的な環境再生を実行するチャンスを得るには、ダイナミックな社会的かつエコロジカルな経済システムが動き始めることが必要である。このような条件は、民間と公共が不断に多額の投資をしている新しい開発や再開発が行われている地区において現われる。加えて、都市のエコロジカルな再生に関与する多くの組織団体がその地区にあることも重要である。

たとえば、学校、ガーディナー、公園管理者、都市計画事務所、芸術家、その他多様なクラブ、協会などである。

コミュニティの環境が著しく改善されることで、コミュニティのアイデンティティが強化され、住民の市民参加欲が増すであろう。質の高いコミュニティの環境はビジネスも投資を促すであろうし、また、新しい環境ビジネスを誘致できる可能性も出てくる。

以上のことから、この地区の計画の目的は次のようになった。これらの目



ルードニッツ近隣住区がたどる4つのステップ（予想図）

Lucien Kroll, Leipzig 1995

的はさらに、1か月に1回のプロジェクト会合や国際都市計画セミナーを通じて、さらに磨きがかけていった。

◎アーバン・デザイン：アーバン・デザインの第一の目的は、多様な「都市イベント」（南北の商業、小売り、オフィスが立地する街路）と「自然経験」（ランドスケープと静かな田舎、レクリエーション活動がある緑の回廊）とを統合することである。

◎生活と仕事の混在：「田園へのゲート」「アーバン・ボール」の中心地の街路では商業を優先はするが、それ以外では実験的に住宅を混在させるようにする。

◎魅力的な公共空間：特に緑の回廊と中心地の街路において道路面積を減少させ、道路のデザインをし直すことにより魅力的な公共空間を創出する。

◎アクセスが便利な都市：魅力的かつ効率的なネットワークを構築することによって、歩行者および自転車利用者が多くの日常的に利用する場所（仕事、買い物、学校、レクリエーションなど）に容易に行けるようにする。また、都市と周辺とのコネクションを形成する。

◎体験的ローカル・サイクル：都市内の資源をリサイクルする、時間とともに成長するプログラムの開発。

◎都市環境の保全：アーバン・エコロジーの保全。

さらに、アーバン・エコロジーをめ

ざす「地区建物ブロック」では、交通、水、エネルギーについても取り組んだ。

◎交通：計画当初の目標は、アイレンバーger鉄道駅の鉄道路線跡地を自動車道路にするという計画に対抗できる有効な代替案を提示することであった。

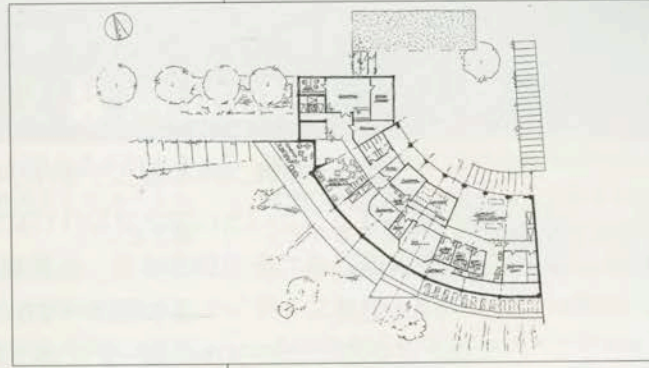
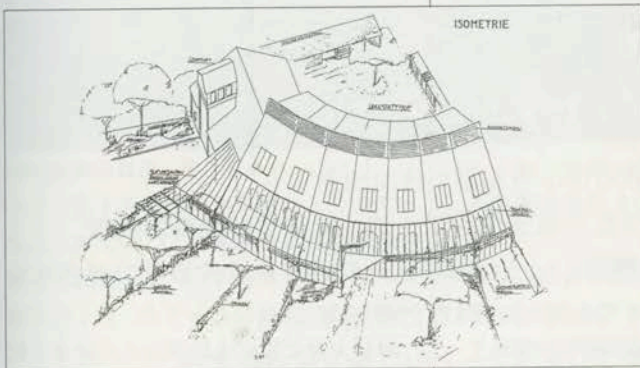
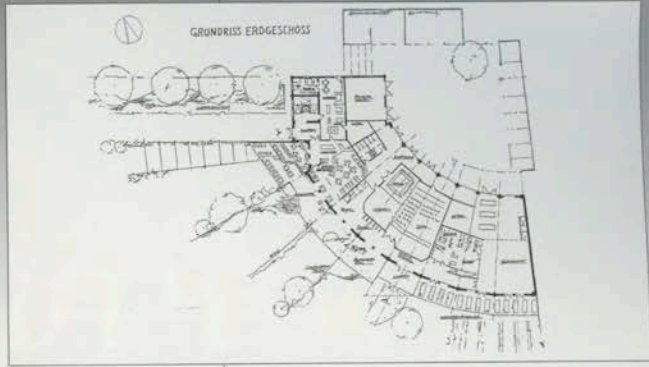
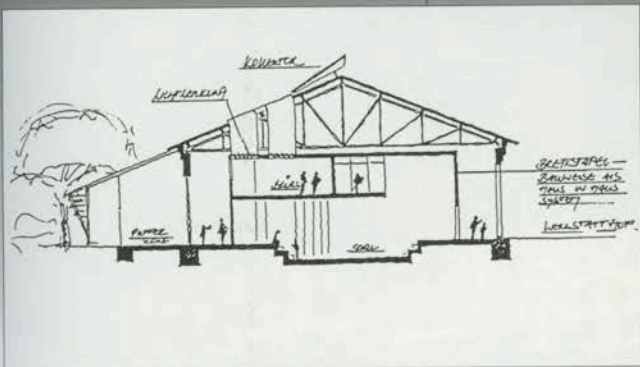
このことは、総合的な都市開発のコンセプトという観点から非常に重要な意味を持っており、また交通局との対立を解消するためにも必要であった。

◎水：目標は、水の保全技術および地区内のビルの水循環システムの開発、ビル再開発後において設備の消費高に応じて請求できるシステムの導入、複数のビルの協力による雨水利用を行える近隣地区をベースとした統括された上水・下水システムの実現である。

特筆すべきは、緑の回廊の側溝に沿って雨水を集水する計画である。計画では、建物のなかや生態系保全用の沼などを経由することになった。また、子供たちが遊ぶ、学べる水遊び場、「アーバン・ボール」での自動車交通の騒音を消す効果を持つ滝なども計画された。

◎エネルギー：一体化した近隣住区の開発をすることによって、二酸化炭素の排出を削減し、エネルギーを保全する可能性を探索する。この目的のため、次のような方策が提案された。

2つのモデル・ビルに、エコロジカルで省エネルギーの建物のコンセプトを導入し、それぞれの立地地区にふさわしい開発を実施する。これには、古い建



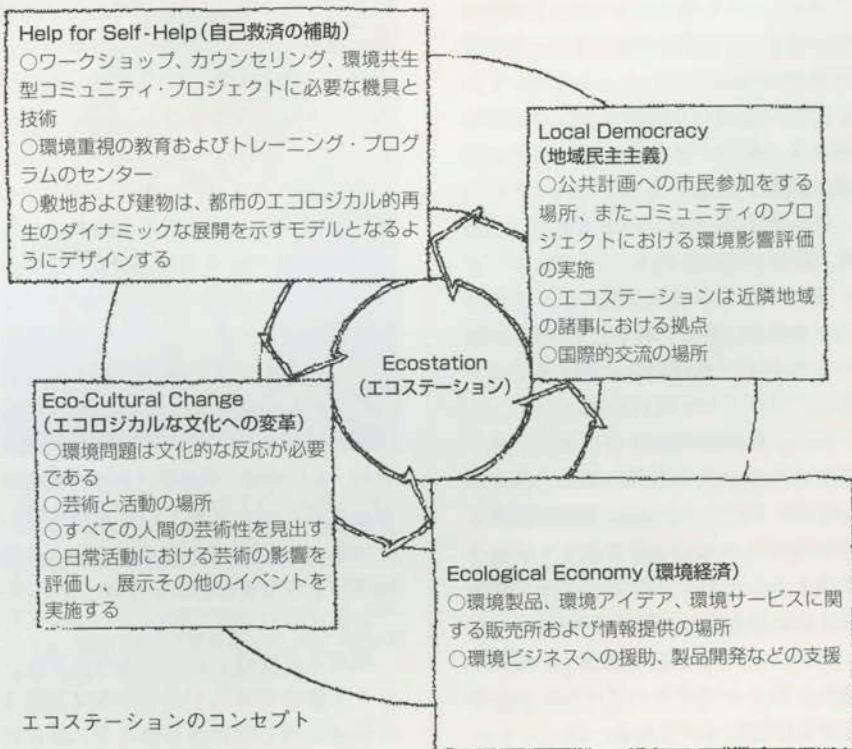
エコステーションのデザイン案

物が現存するエリアも、新しい再開発のエリアも含まれる。これらは、その他の地区の先行事例となるとともに、市民や地主を啓発する。

もう一つのモデル・プロジェクトは、コ・ジェネレーションシステム、そして排出熱を再利用した熱交換システムの導入である。たとえば、地元のビール醸造所からの排熱を利用することにより、低価格で2,000戸の集合住宅に温水と温熱を供給することができる。

計画されている地区内のエネルギーと温熱ネットワークは、将来他のエネルギー源と併用させることも考えられる。このようにして、この地区は徐々に太陽エネルギーなどの再利用可能エネルギーへと移行していくようにしたいと考えている。

以上のようなプロジェクトの次の段階としては、プロジェクト3の目的である経済・雇用に関して具体的な成果をあげられるように取り組むことである。そして、さらなる作業として、近隣住区の緑化、廃棄物減収プログラム、新しいまとまりのある街路づくりのコンセプトなども考えられる。



エコステーションのコンセプト

C.エコステーション/緑のワークショップ

都市のエコロジカルな再生の実質上の実行者と支援者は、官僚的な行政の都市計画部署や組織ではなく、地元住民、地元企業、その他のコミュニティの間

題意識を共有する公共・民間の団体である。その策定から実践まで、民間の関与と民間の資金が必要である。

しかし、このような状況は地元住民がそれぞれの購買活動や経済活動、移動やレクリエーションの形式を改善することに個人的に価値を見出さなくて

はうまくいかない。

人々にエネルギー消費や水利用を節約させ、物質消費を減少させる「一体資源管理」に参加させるには、みなそれぞれに価値を見出さなくてはならない。人々は、自分たちのためであると自覚なくしては動かず、また彼らの行動によってコミュニティの質が著しく向上することを理解する必要がある。市民参加を促し、都市をエコロジカルに再生させることは、再生計画の手法を考えることやコミュニティ組織の形成に大きな成果をあげることができる。

この際必要なのは、市民団体、地元経済を対象とし、特定の近隣住区の開発や自立する可能性を促すようなコミュニケーション・システムや管理手法、そして情報システムである。

「エコステーション」のコンセプトは、経済、組織、社会、文化の新しいシステムを創造するインフラストラクチャーである。エコステーションは、このプロジェクト・エリアの中核であり、公共性のあるコミュニケーションの場、そして会合の場として機能することが求められる。そこでは近隣コミュニティの民主主義が発露する場として、プロジェクトが計画され、実行組織がつくられ、議論が交わされる。そして、ワークショップをはじめとして、フェスティバルや発表、展示、セミナーなど、市民のエネルギーと資源を活用するさまざまなプログラムが行われる。

また、その建物自体がエコロジカルでエネルギー効率の高い建物の見本として建てられる。さらに、従来の経費を節減するとともに、新たなサービスを提供することで得る収入によって経済的に自立することが期待される。

エコステーションを開発し、運営することもライブチヒ・プロジェクトの重要な目的の一つである。

5.その後の経緯とまとめ ——都市のエコロジカルな 再生は可能である

プロジェクトを遂行させていくため、ヨーロッパ・コミッションがその設立を求めた独立した学際的なプロジェクト協会は、結局は実現されなかった。その代わり、ライブチヒ市は決定権を市

の雇用創出所に委譲した。ヨーロッパ・コミッションは、これにもそれなりの根拠があり、このプロジェクトの事業特性を損なうことはないだろうと判断した。しかし、その判断は楽観的すぎたといわざるをえない。

結局はこのことがプロジェクトの方向性、財源、プロジェクトのツールなどを大きく変更することになった。つまり、計画期間の3年間の半ばには、プロジェクトに資するよりもプロジェクト委託契約企業を資する方向へとシフトしてしまったのだ。プロジェクトを起ち上げた者は排除され、協同プロジェクト・オフィスの中心も受託企業の人間となった。

ついに、96年の春以降、当初の計画は大きく変更された。オストラウム・プロジェクトにおける緑の回廊を実現させるすべての作業と、エコステーションに関する業務は停止させられ、エコステーションとしてリースしていた建物の契約も破棄された。エコロジカル近隣地区開発に関する業務は、縮小された目的を達成することしかできなくなった。

計画へのアドバイスを行う委員会の主催者は、市の行政組織から独立した人間を選定すべきであったが、プロジェクトの委託先を決定する権力を有する者が選ばれた。アドバイス委員会の主旨と構成委員も変更された。

その事実が明るみになり、96年の7月に、ヨーロッパ・コミッションは当初の目的、実行期間、予算などが担当機関の利益誘導に改変されているという疑いを持ち、援助を一時的に打ち切り、外部機関による監査をするよう命じた。

結果はクロであった。

現在も市は独立した学際的なプロジェクト協会を導入することなく、通常の地域計画と契約書をつくり、都市計画部の主導によってプロジェクトを実現させようとしている。

1998年になって緑の回廊のための土地の買収を始めると同時に、ランドスケープの国際コンペを開いたが、どのアイデアも本来のコンセプトを部分的に理解したものでしかなかったと聞いている。エコステーションの創設は決定され、市は地主との交渉を続けてい

るが、どのような機能を持たせることになるかは定かでない。

※

今回のモデル・プロジェクトのように学際的で包括的なプロジェクトが、従来型の官僚的組織によって運営されると、さまざまな問題が生じることは明瞭に理解できる。問題がそのような人為的な点にあるにもかかわらず、人々は往々にして、エコロジー都市は複雑すぎて非現実的、試みる価値がないから失敗したのだという結論に陥りやすい。

しかし、だからこそ、私は現時点でのプロジェクトの成果を報告することに意義があると考えた。このプロジェクトが「ローカル・アジェンダ21」を実践していくにあたっての、多くの方法論と大量な知見を提供してくれると同時に、都市のエコロジカルな再生のコンセプトをさらに洗練させていくことにも貢献できると考えたからである。

それは以下のようにまとめられる。

1. 「ローカル・アジェンダ21」は実践可能である。これは、都市と社会構造を再構築するという複雑な過程の合意を形成するうえで十二分に役立つ。また、環境問題を解決し、雇用を創出することも支援することができる。
2. 環境計画において典型的に提案される、孤立した小さな戦略は本質的な問題を解決することはできない。「都市のエコロジー的再生」は幅広いアイデアと新たな包括的なアプローチの知見を提供してくれる。
3. 「ローカル・アジェンダ21」の成功の是非と「都市のエコロジー的再生」の努力の成果の有無は、いかに既存政府から独立し、かつ実行能力のある組織をつくりあげられるかどうかによってくる。このプロジェクトでも、行政側に適当な注意力と協力姿勢さえあれば、そのような組織をつくるのが可能であることを示している。
4. 伝統的な枠組みによる障壁を克服するためには、新しいタイプの国際的な協力が有効である。ある特定の条件による補助金の支援も重要な役割を果たす。しかし何より重要なのは、国際的ネットワークをさらに強化し、相互に支援態勢を構築することである。